

心理社会的ストレスと心拍変動との関連  
—自律神経機能亢進例に対する薬剤の奏功性—

**【目的】**

山下分類のパターン2で確認された4種類あるサブタイプの臨床的意義に関して、薬物学的治療アプローチの面から検討を試み、抗不安薬主体の抗うつ療法の有効性、並びに薬剤投与前後における自律神経の活動性変化について検討を加えた。

**【対象・方法】**

対象例21例は、年齢が16歳～68歳(平均年齢37歳)。21例は、LF・HFが寛解例(以下R群)より高値で、かつLF/HFが1以上をtype1、1以下をtype2、LFが高値でHFがR群のM±SD内をtype3、LF/HFが2以上をtype4に分類した。ホルター心電図は、22:00～6:00までをサンプリング時間に時間・周波数領域解析を行った。

**【結果】**

薬剤療法により完全寛解(以下CR)と部分寛解(以下PR)した例数は、共に7例であったが、時間領域のNND・SDNN・SDANN・総N-N数は、投与前後で有意差を認めなかった。一方、周波数領域は、交感神経機能を反映するとされるLFとLF/HFが投与後に有意な低値化を示したが、HFには、有意差を認めなかった。また、type3と判断された7例は、CR3例、PR2例と高い奏功性が得られた。

**【結語】**

1)自律神経の活動亢進を伴ううつ状態に対する薬物療法は、21例中14例(66.7%)の奏功率が得られ、全例にLF/HFの有意な低値化を認めた。2)奏功した14例中9例(64.3%)は、クロキサゾラムを服用していたが、本剤の奏功機序は、異常亢進した交感神経活動の是正や、自律神経両系の相対的關係の崩れを修復するものと推測された。3)周波数領域指標のうち、ことにLF/HFは、治療効果判定する際の有用な指標になりうるものと考えられた。

# 治療前後における自律神経のパターン変化

